

【総評】

戦後 70 年の日韓学生 of 果敢なる挑戦

森山新（お茶の水女子大学）

2004 年に第 1 回が開催されて以来、今年で第 10 回を数える今回のセミナーは、戦後 70 年、日韓国交回復 50 周年という歴史的に重要な年に開催された。かつ、時の日韓両政権はナショナリズム重視、国益優先の限界を越えることができず、対立の構造を打開できずにいる。そのような中、真理を追究し正義感に溢れる学生と教員とが、その壁を乗り越えようとの思いから、今回のセミナーは「戦後 70 周年、日韓国交回復 50 周年：日韓学生の対話」をテーマに行われた。

今回はどのグループのテーマも各自がナショナリズムを越えることなしには到底合意に至ることができないテーマを掲げ、お互いに友情を深め相手の言葉を学びながら、相手の意見に耳を傾け、お互いが納得できるような Win & Win の回答を求めて共同発表、共同声明を行った。学生たちは限られた時間の中で言葉と文化、受けてきた教育などの壁を乗り越えながら、見事な最終発表をしてくれた。またこれまでの日韓セミナーは、韓国側の日本語力に甘え、すべての行事が日本語により行われてきた。しかしそれは、国を越えたインターナショナルなアイデンティティの構築とインターカルチュラルなシティズンシップ教育にとって、解決すべき重要な課題の一つであった。今回は訪韓までの期間に学生たちに韓国語の学習を課し、第一次発表を韓国語で行ってもらうという「難題」を日本側学生につきつけた。学生たちは必死に韓国語を学び、第一次発表でも悪戦苦闘して自身の発表を行っていた。しかしそれが日本語ですべてを行わなければならない韓国側学生の立場を理解し、両国の学生の親密な関係の促進につながった。

第一の社会進出のグループは、日韓共に大きな課題である女性の社会進出をテーマにその解決策を模索した。互いに相手を批判するのではなく、お互いの成功に学びながら、日韓両国が共通の課題に取り組むことは、両国それぞれの課題である女性の社会進出解決のみならず、両国が強いパートナーシップに結ばれて共に歩いていく上で重要であり、そこにおいて両国を代表する女子大である同徳女子大とお茶大の学生が先頭に立つことの意義は大である。

第二の歴史問題のグループは、日韓の対立の根本である歴史問題、中でも解決が極めて困難な領土問題と戦後未解決の課題として浮上した慰安婦問題とを取り上げた。とりわけ領土問題は両国学生が義務教育という国民教育の中で、当たり前のもので学んできた内容であり、たえず対立の火種となってきた。これこそ学生一人ひとりが自身の中に育てられたナショナリズムを見つめ直し、それを克服していかなければ、そもそも解決の糸口すら見出すことは不可能である。セミナー中に訪問した軍事境界線は、人が足を踏み入れることができない環境となる一方で、地上の楽園として、動植物たちが国境を気にせず自

由に行き来している。そのような地球に、いつしかナショナリズムが台頭、国境線を引き国土を定め、国民教育を施す中で、我々人間はいつしか心の中に国境線を引いてしまった。今回のセミナーでは学生たちが友情を基盤とし、自身が受けてきた教育を見つめ直しながら、領土問題の解決を話し合った。慰安婦問題は単に国家間の問題としてではなく、女性の人権問題としても扱われるべき問題であり、その意味で両国の女子大生が討論することの価値は大である。これまでのセミナーでは、お互いの認識の違いに対する気づきには至ったものの、それを越えて共同の声明を行うという点では少なからず課題が残ってしまっていた。しかし今回のセミナーではそれを越えた最終発表であったと言えるだろう。

第三の反日・嫌韓をテーマにしたグループでは、まさにセミナーでの経験を基盤に、何故韓国の人々が反日なのか、日本に何を願っているのか、何故日本の人々の一部は韓国が嫌いなのか、どうすれば好きになれるのか、といった問題についてその原因を真剣に考え合い、解決策を提案した。参加者たちは自ら自身が、または親をはじめとした周囲の人たちが、嫌韓であったり反日であったり、またはさまざまなステレオタイプや誤解を抱きながら生きてきたりしていることに気づき、互いにそれを告白し、このセミナーを通じてそういった気持ちが大きく変わっていった経験の中で、このような対話と交流こそが、反日・嫌韓を越える道であると確信をしていた。

第四のこれからの日韓交流のあり方を考えるグループでは、これまで行われてきた両国の交流が何故日韓関係を改善する力となり得なかったのかについて考え、また第三グループ同様に、今回の交流セミナーで、互いの国に対する自身の意識が変わっていった経験をもとに、これから何をすればよいのかについて、研究と実体験の両面から説得力のある提案を行った。

第五の戦後 70 年の日韓学生共同声明では、冒頭で、安倍首相が戦後 70 年首相談話に謝罪の気持ちが盛り込まれないという当日朝の報道が紹介され、それに代わるものとして共同声明が行われた。共同声明ではまず戦後のこれまでの日韓関係を振り返り、その上で日韓の学生が日本語と韓国語で同一の声明を発表した。その内容を聞きながら、時の両政権が何と愚かで心の狭い争いをしているのか、何故にこの学生たちのような声明ができないのかといった気持ちにならざるを得なかった。人間はだれしも過ちを犯すことがある。それを隠蔽するのではなく、真摯に見つめ、誠意をもって対応していくことこそが信頼回復には近道であること、また日本は確かに何度も「謝罪」を口にしてきたが、残念ながら日本から幾多の傷を被ってきた、韓国をはじめとした周辺の被害国はそこに真摯と誠意を感じることができなかったということ、対話を通じ日本の学生は強く実感していた。同時に韓国の学生たちも、日本の政治家とは明らかに異なる日本の学生の本当を目にしなが、過去を許し、ともにいつまでも歩んで生きたい大切な隣人（パートナー）として、日本の学生を素直に熱く包容（抱擁）していた。

今回、セミナーの全期間、寮を提供していただくことで、日韓の学生が寝食をともにし、対話と協働の場を確保することができた。本セミナーは過去と国境の壁を越えられずにい

る日韓両国の学生が、日韓と東アジアの共生を実現するための道を模索することを目指している。そのために前々回から TV 会議システムを導入し、毎週のように遠隔の事前交流を続けてきた。今回はそれに加え、セミナーの全期間、日韓の学生が寮や合宿で寝食をともにすることで、共生のための対話と協働の場を確保したことは、難しい課題にもかかわらず対話を深めることを可能にしたと思う。また今回は同じく日本の植民地として苦難を負ってきた台湾からも 1 名の学生が参加したことで、単に二国間ではなく東アジア全体につながる可能性を持つことができた。

さらにセミナー運営の多くが学生にゆだねられたことである。それにより、学生の姿勢が受身にならず、自らが築き上げるという意識を高めた。とりわけ最終日の送別会の盛り上がりは、準備からセミナー期間中の企画のすべてを学生たちが作り上げてきたという達成感と自信に満ちており、これまでのいずれにも増して、学生たちの感動と涙を誘った。

最終日、ひそかに準備した感謝の手紙を韓国側の学生に手渡すと、韓国側の学生は涙で喜びと別れの悲しみを表現、それに日本側のメンバーももらい泣きし、互いに抱き合う場面が至るところで見られた。学生にゆだねることはある意味不安もあり、失敗も覚悟しなければならないが、最終日のその光景は、学生に運営を委ねてよかったとの思いを我々教員に抱かせてくれた。また学生たちが国を越えて一つのゴールを目指して協働する経験は、今後グローバル時代を生きる彼女たちに大きな経験となるであろうし、国や政治が越えられずにいる国境の壁を私たちは越えることができるということを確信できたに違いない。

もちろん 1 学期間の遠隔交流と、1 週間の合宿でできることは限られている。しかし今回の経験は、これからグローバルな心を持ちながら、日韓を、東アジアを、そして世界をまとめる力と自信を、彼女たちにあたえてくれたと信じている。これからもフェイスブックや交換留学という形に変えて、継続、発展していくことを願ってやまない。

最後に、ここまで今回のセミナーを成功に導いてくださった同徳女子大学の金榮敏先生、日本語科の諸先生方に心から感謝を表したい。また学生寮をはじめ様々な便宜を図ってくださった金樂薫総長にも感謝したい。次回の日本でのセミナーでそのご恩返しができると思っ